

白藍塾オリジナル

2014入試小論文分析&解答のヒント

2014年4月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・樋口裕一・大原理志

●東大後期・総合科目Ⅲ

例年通り、2つの大問に、それぞれが2つの設問（どれも500字以内）から成っている。ただし、昨年度は4つの設問がどれも説明問題だったのに対し、今年度は第一問が「説明問題＋小論文問題」、第二問が2つとも小論文問題というように、論述重視の出題形式になっている。また、ここ数年続いた、日本史や世界史の知識がなければ答えられないタイプの問題はなくなったが、どちらも日本の近代史の知識がないと答えにくい問題であることは間違いない。

第一問は、「健康」という考え方が近代国家のあり方と強く結び付いていることを論じた文章。近代国家が国民を都合よく管理・支配するのに、「健康」の概念や西洋医学を積極的に利用してきたことが説明されている。そして、その事例として、明治以降の近代日本で、制度化された医学がいかに関国民に「健康」を強制し、そのために生活のすべてを管理するようになったかを具体的に分析している。

口語体で一見読みやすいが、こうした権力分析の考え方になじみのない人は、理解するのに苦労するかもしれない。

問一は、「近代国家における西洋医学の役割」について著者の主張をまとめる問題。

課題文の第5・6段落にあるように、近代国家においては国民の労働が国の富を作り出すので、健康でよく働く国民が必要だった。そのために国民を管理するのが、制度化された医学の役割だったわけだ。

基本形Aに従って、まずはそのことをずばりと示す。そして、近代日本において西洋医学がどのように制度化され、国民の健康を管理してきたかを、戦前と戦後に分けて具体的に説明すれば、うまくまとまるはずだ。

問二は、現代の日本社会において「健康」という概念が私たちの生活に及ぼしている影響について考える問題。小論文問題ではあるが、イエス・ノーの形にはしにくい。「健康の概念は、私たちの生活にこのような影響を及ぼしている」ということを最初にずばり示し、以下、それを検証していく形にすれば書きやすい。

ただし、もちろん、課題文の内容を無視して書いても意味がない。課題文の分析を踏まえると、「私たちの生活にとって、健康はよりよく生きるためのものではなく、それ自体が目的になっている」「私たちは、健康でなければならぬと思われ、つねに健康への不安を抱えて生活している」などの答えが考えられる。そのことを、近年の健康ブームやアンチエイジング

の思想、健康政策などからめて、具体的に説明すればよい。

課題文に反論して、「健康の概念は、国家による人民管理ではなく、人々が自分らしく生きるためにこそ役立っている」という方向でも書けないことはないが、その場合は、「確かに～」の部分で、課題文の内容を理解していることをしっかりとアピールする必要があるだろう。

第二問は、「知識人」とはどんな存在かを論じた文章。読みやすい文章だが、これも「知識人」というものについてふつうどんなことが言われているかを知らないと、ピンとこない人もいそうだろう。

問一は、著者の考えを踏まえて、「近代日本における知識人の特質」について論じる問題。

著者の考えでは、「知識人」とは、職業的なものではなく、アマチュアとしての自由な立場から、自分の信じる正義のために声を上げる少数派、ということになる。その定義が、近代日本の知識人に当てはまるかどうかを考えればよい。

ただし、著者の定義に当てはまるような知識人は、近代の日本にはあまり思い当たらない。そもそも、次の問二の意図を考えると、問一はノーで答えるほうが書きやすいと思われるので、福沢諭吉、中江兆民などの有名人を例に挙げて、「近代日本の知識人は、アマチュアとしてではなく、大学人や政治家などの特権的なエリートとして、つねに大衆を導く立場に立つことが多かった」などと論じるのが正攻法だ。

問二は、著者による「知識人」像が、現代社会においてもつ意味と有効性について論じる問題。「著者の考える知識人のあり方は、現代社会において有効か」などと問題提起をすればよい。

イエス・ノーどちらでも書ける問題だが、情報化が進んで誰でも自分の意見を発信できるようになった現状を踏まえて、イエスで答えるほうが書きやすいだろう。問一で、近代日本の知識人が特権的なエリートだったことを論じた上で、問二で「情報化が進んだ現代では、誰もがアマチュアとして知識人の役割を担うことができる」「現代では、エリートと大衆という区別がなくなったので、声を上げる勇気があれば誰でも知識人になれる」などのように論じれば、一貫した答えになる。

ノーで答える場合は、「現代は大衆化が進んで価値観が均質化しているので、あえて少数派として声を上げる役割を引き受ける知識人は存在しにくい」などのように論じることができそうだろう。

◎執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179)

<http://www.hakuranjuku.co.jp>